地域の関係者による授業評価の試みに関する一考察
—地域での学修に対する関係者の「語り」の分析を通して—

菊田尚人*†・橋爪孝夫**・阿部宇洋**

本研究の目的は、地域の関係者が地域での学修をどのように評価しているのかについて明らかにすることである。「フィールドラーニング—共生の森もがみ(山形から考える)」の関係者に対する半構造化インタビューを通して、「語り」として表出された学修に対する評価の実態を明らかにする。それにより、地域の関係者が行う授業評価では、「学生が積極的に活動へと関わろうとする姿勢に価値を置きながら授業を評価していること」「地域での学生の学びの質保証を意識しながら授業を改善しようとする姿勢で評価していること」「授業終了後の学生による継続的な活動への期待が地域の関係者の授業評価には込められていること」が明らかとなった。

Keywords：地域、アクティブラーニング、「フィールドラーニング—共生の森もがみ(山形から考える)」、授業評価、インタビュー

1. はじめに

本研究の目的は、地域の関係者が地域での学修をどのように評価しているのかについて明らかにすることである。それによって、地域での学修を充実させるための授業評価 [1)]に地域の関係者を参画させることの実現可能性を示せることに本研究の意義がある。大学における一般的な講義形式の授業に対し、フィールドワークといった地域での活動を組み入れたアクティブラーニング型の授業の特徴は、地域の関係者が授業のステイクホルダーとして位置付けられることである。しかしながら、地域の関係者がどのような観点で授業を評価するのかという実態を明らかにした研究は管見の限り見当たらず、地域の関係者を授業評価の一員として明確に位置付けようとする取り組みが進んでいるとはいえない。地域の関係者が授業評価の担い手の一人として十分に機能することを示そうとする本研究は、地域の関係者が大学教育に積極的に参画することにつながる知見を提供できるだろう。

本研究では、山形大学の基盤共通教育科目「フィールドラーニング—共生の森もがみ(山形から考える)」に関わる最上地域の関係者に対する半構造化インタビューを通して、地域の関係者の「語り」として表出された授業に対する評価の実態を明らかにする。「フィールドラーニング—共生の森もがみ(山形から考える)」は、山形県最上地域の 8 市町村で 1 泊 2 日 2 回の自然体験活動や社会共創等に取り組みながら、課題発見や探究の力を身につけることを目標とする科目である [2)]。各市町村の教育委員会が用意した教育プログラムのいずれかに 5～15 名程度の学生がそれぞれ参加することとなっており、科目の特徴として、大学教員と地域の関係者が協働で教育を行っていることがあげられる。そのため、地域の関係者による授業評価の実態を明らかにしようとする、本研究の目的に適した授業科目だといえる。

インタビューは、1 市町村につき、授業に関わる大学教員 3 名と地域の関係者数名とで行った。今回は、毎年の教育プログラムの内容に大きな変更点が見られない 2 町村に依頼した。事前に用意した質問項目は、「この授業の成果として感じていることは何か？」と「この授業の課題として感じていることは何か？」である。それぞれについて地域の関係者の回答を聞きながら、その回答に応じてより詳細な情報を収集するために適宜質問を追加した。なお、研究にあたって、山形大学地域教育文化学部の倫理委員会より承認(承認番号 : 2022－38)を受け、地域の関係者には本研究の趣旨等を説明し、同意書を提出してもらった。

分析に当たっては、インタビューの内容を録音したものを文字に起こし、データセットを生成した。データセットの中で、この授業の「成果」や「課題」に関わる発話がされている箇所を対象に、実際の発話内容

*山形大学　地域教育文化学部（Yamagata University, Faculty of Education, Art and Science）
**山形大学　学士課程基盤教育院（Yamagata University, Institute of Arts and Sciences　（First-Year Experience））
†責任著者：菊田尚人(e-mail ; n-kikuta@e.yamagata-u.ac.jp)

を整理した。「成果」と「課題」に関わる発話に焦点を当てた理由は、地域の関係者による授業評価の研究がほとんどない現状で、まずは授業評価の内容として最も分かりやすいものから地域の関係者の評価を明らかにしようと考えたからである。

2. X 村での学修について

(1)　1 回目の学修活動

オリエンテーション、ガイダンス、事前学修を経て、第 1 回目の現地における活動が実施された。1 回目の活動は、山形大学からバスで出発し、フィールド最寄り駅に到着の後、地域の関係者と合流した。1 泊 2 日の日程で、宿泊先は X 村の農家民宿を利用した。

活動場所に到着すると「地域の自然と保護活動の説明」を湿原最寄りの公民館において受講した。トイレや食事等も公民館を借りる形である。

座学では自然保護委員や環境保全活動をしている地域の関係者から、人間が湿原に入ることによる環境の変化など、湿原での注意点や観察方法を教わった。その後で実際に湿原へと移動し、貴重生物や里山の生態系、湿原の生態系の話などを聞きながら簡単な観察を行った。

湿原での活動終了後は公民館に戻り、振り返り活動を実施し、本日の講義内容の確認や翌日の活動の説明を受けた。

2 日目は本格的な観察を実施した。その際、学生は個体数の少ないギフチョウやヒメギフチョウを観察することが出来た。これらの蝶は捕まえて観察するわけではないため、観察方法を講義されていないと、見極めは容易でない。事前に講義を受けていた学生は実際の体験から、観察法の重要性を体感していた。

観察の後に、湿原の保全活動として木道整備の必要性の話を現場で聞いて、2 回目の活動で実施する植物の刈り取り作業のための植物観察、刈り取り植物と貴重植物の差などを学んだ。刈り取り対象となる植物は主にヨシで、その他の貴重植物を刈り取らないようにする見極め方を入念に学んだ。2 日とも木道を介した活動で湿原内に踏み込む活動ではなかった。

帰路は役場の担当職員に、フィールド最寄り駅まで送迎してもらい、バスで山形大学まで帰り解散した。

写真-1　公民館での講座の様子

写真-2　木道での観察の様子

(2)　2 回目の学修活動

2 回目の活動では、保全活動が中心となった。初回同様の交通行程、宿泊場所である。

1 回目の活動では直接湿原内へ踏み込むまではなかったものの、今回は湿原内での活動が中心であり、学

生は長靴を用意し湿原で活動した。前回の活動では、動植物の貴重性を過重に教示されたためか、初めはおっかなびっくりであったが、次第に動植物の観察、判別にも馴れ各自の持ち場に分かれてヨシ刈りを行なった。

ヨシ刈りは草刈り鎌で中腰になりながら実施するためひどく重労働で、学生にとっては馴れないきつい作業と考えられるが、ヨシと貴重植物の判別のコツなどを地域の方と会話しながら積極的に学んでいた。活動後は農家民宿で振り返りを行った。

2 日目は、湿原保全のボランティアをしている村外の人たちも合流し、木道の整備やヨシ刈りの続きを行なった。午後には、慰労を兼ねたオカリナコンサートが湿原入口の森の休憩所で行なわれた。

バス出発の兼ね合いで、オカリナコンサートの途中で学生が帰路に就くことになったが、地域の人たちとの交流は思ったよりも捗ったようで、帰り際では惜しむ声や再訪を望む声が上がった。

X 村における教育プログラム活動は、貴重動植物に関する学びを湿原ですぐに確認できることに特徴がある。日常では一切見ることのない湿地生態系の学修や湿地生態系の保全活動を長年継続的に実施している地域の人たちとの交流は、学生が環境保全の大切さや問題点について考えるきっかけとなっている。さらに、地域で学んだことを自身の出身地の環境や、専攻分野に引きつけて考える学生など、当該湿原以外の環境保全活動に興味を示す学生もいた。

写真-3　ヨシ刈りの様子

写真-4　オカリナコンサートの様子

3. Y 町での学修について

(1)　1 回目の学修活動

オリエンテーション、ガイダンス、事前学修を経て、1 泊 2 日で第 1 回目の現地における活動が実施された。学生は朝から山形駅に集合し、電車で Y 町最寄りの駅まで移動し、指導にあたる地域の関係者と合流した。

駅から Y 町の農村環境改善センターへ移動し、開講式と活動説明会が行われた。学生はここで Y 町の基幹産業である農業に関する基本的な説明を受けた後、実際に野菜苗の定植体験活動に取り組んだ。最上 8 市町村で実施されている様々な教育プログラムの中でも、Y 町のプログラムは全ての日程をこの野菜の定植体験活動を中心に行うことに特色がある。昼食をとる以外は全ての活動時間を農地での定植体験活動に振り向け、活動終了後は夕食、Y 町温泉施設入浴で疲れを癒した後、Y 町の農業体験実習館に宿泊した。実習館では、学生が主体的にその日の活動を振り返るミーティングを実施していた。

2 日目、起床後朝食をとった後、昨日に引き続き野菜の定植体験活動を続行した。この日も昼食の時間以外は全ての活動時間で農作業を行った。活動終了後、電車で山形市へ戻り解散となった。

(2)　2 回目の学修活動

2 回目の活動も、農作業中心に活動した。

1 回目と同様に、学生は朝早くに山形駅集合し、Y 町最寄り駅まで電車で移動した。地域の関係者と合流し、農村環境改善センターを経由して、農地に向かった。

午前中は、前回の定植体験活動の続きに取り組んだ。午後は野菜の播種活動ということで初めて別の種類の農作業に取り組んだ。その後は、夕食や温泉施設入浴、体験実習館宿泊という流れを辿り、夜間には振り返りのミーティングも実施していた。

2 日目、起床後朝食をとった後は、野菜の定植体験活動に取り組んだ。昼食時間以外はこれを夕方まで続行し、農村環境改善センターへと戻ってきたところで、全教育プログラム行程が終了となった。その後は、Y 町最寄り駅から山形駅へと戻ってきて、解散となった。

Y 町における教育プログラムの活動は、ある意味で農業の本質ともいえる単純作業の繰り返しが多く見られ、他の 8 市町村と比べると学生の活動場所や行動範囲が狭い傾向もある。そのような状況の中で、学生は最後の日程まで辛抱強く現地での活動に取り組んでいたといえる。

写真-5　自然体験活動の様子

写真-6　活動終了後の片付けの様子

4. X 村での学修に対する地域の関係者の「語り」の分析

(1)　調査の概要

インタビューは、2023 年 3 月 17 日(金)に X 村の教育プログラムに関わっている教育委員会の担当者 2 名(A 氏、B 氏)に行った。A 氏と B 氏は共に、現地での学生指導にあたっており、この授業自体にも長く関わっている。

(2)　授業の成果に関する「語り」の内容

X 村での学修の成果に関する地域の関係者の「語り」を整理してみると、以下に示す 3 つの事柄を授業の成果として捉えていることが明らかとなった。それぞれの内容について、実際のデータセットを示しながら説明していく。

①　学生の積極性や自発性を促進すること

地域の関係者がこの授業の成果としてあげていることは、活動の中で積極性や自発性を発揮する学生の姿が見られることである。

授業の成果について問うたインタビュアーの発言に対して、A 氏は最初に「学生の皆さん一生懸命でいろいろ興味を持って頑張ってくれてますので、本当によかったなと思います。いろんなことに興味持って率先してやってくれる。」と答えている。それに続けて、こちらから具体的な学生の姿として印象に残ったことを聞いてみると、湿原での自然保護活動の時に「水浸しでも頑張ってやってくれてました。」と話してくれた。同様に、B 氏からもオカリナコンサートにおける学生の積極的な様子に感心したことが語られた。オカリナコンサートは自然保護活動に協力するボランティアの労いのためのイベントである。その中で「みんな並んでちゃんと前のステージの方さ楽器もって、ノリノリでした。」と話してくれた。

さらに、自発的な学びの背景にある学生の理解力の高さに感心しているという話もあった。活動中の姿に関して、「でも、簡単に言うとほっぽってても結構やってくれますけどね。」(A 氏)や「飲み込みが早い。みんな頭いいから。」(B 氏)といった学生のよさについての発言があった。また、活動時間の関係で、振り返りの時間を十分には取れない中で、「最終的に発表のとき、うまくまとめてくれてますよね。あれしか(振り返りの時間をとることを)しなくてもちゃんと分かってる。」(A 氏)というように自分たちで学びを深める学生の姿を高く評価していた。

② 多様な他者と関わる機会として機能すること

地域の関係者がこの授業の成果としてあげていることは、ここでの活動自体が学生にとっての多様な交流の機会として機能していることである。

インタビューでは、この活動が地域のボランティアと関わりをもつ良い機会になっているという話があった。具体的には、「ボランティアに来てくれた方たちとも作業をしながら、お話とかいろいろして、地域との関わりも出てきて、大変いいかなと思ってます。」(A 氏)、「いろんな世代の人たちと喋る、一度に喋ることってないと思うので、そういった面では貴重なのかなと(思います)。」(B 氏)といった発言があった。

特に、学生同士の関わりが充実することの要因として、湿原の保全活動という規模の大きなボランティア活動であるという教育プログラムの特性が影響している可能性も指摘された。インタビューの中で X 村のグループの仲の良さが話題に上がった際に、その原因について、A 氏は、「みんなでやらないとできない仕事なので、ただそれだけです。」と答えていた。

③ 地域への親しみの醸成と活動の発展性

地域の関係者がこの授業の成果としてあげていることは、活動を通して地域への親しみを感じた学生が授業終了後も X 村に関わってくれるといった、活動の発展性があることである。

長年この授業に関わっている A 氏から、村内に病院がないにも関わらず、「医学部の学生さんたち、前多かったんですよ。X 村の場合、(参加した学生が)ほとんどが医学部生だって感じで。私は X 村に来たいですって(言ってくれた学生もいた)。」というように、また X 村に来たいと言ってくれた学生がいたという話があった。

加えて、実際に自分たちで車を借りて遊びに来た学生のことについて、A 氏が紹介してくれた。印象的だったのは、「なかなか X 村は不便なところで、来れないんですよね。いきますとかって言って電話くれれば迎えに行きますけども、じゃなかったら交通の便ゼロみたいな。」というように、交通の便に難があるにも関わらず、「そのときはまとまってきてくれましたね。みんな(学部は)違うんだけど、車 1 台に乗って。」と嬉しそうに語っていたことである。

こうした成果は、今回の地域での活動が、学生の更なる活動に向かうことへの地域側の期待へとつながっている。学修面に関して、学生が今後専門分野の知見を身に付ける中で、X 村で研究活動へとつなげてほし

いという願いについての話があった。「興味持ったらそれを調べていただければすごくいいと思うんですよ。」という A 氏は、それについて以下のように発言している。

むしろ研究、X 村で研究してもらいたいとか、こういう昆虫だってなんだっていいですけども、X 村にどんな昆虫がいるか、この昆虫はどういう動きをするとかそういうのをまず一つ取りかかってもらって。ここ Z 湿原だと、結構研究者の方も、来られてますので。全国から大体来ていますよね。植物ばっかりじゃなくて昆虫なんかも、これを全部研究してもらえれば、情報を教えてくれれば大変ありがたいですけど。

(3) 授業の課題に関わる「語り」の内容

X 村での学修の課題に関する地域の関係者の「語り」を整理してみると、以下に示す 2 つの事柄を授業の課題として捉えていることが明らかとなった。それぞれの内容について、実際のデータセットを示しながら説明していく。

① 学生の学びにとって十分な活動時間の確保

地域の関係者がこの授業の課題としてあげていることは、学生の学びにつながる十分な活動時間を確保することである。

授業の課題について問うたインタビュアーの発言に対して、A 氏は最初に「時間が非常に足りないですね。それがまず大事ですよね。」と答えている。具体的には、地域での活動の時間とそれを振り返る時間の両方をとろうとすると、時間的に無理が出てきてしまうことを課題だとしていた。実際の A 氏の発言は、以下の通りである。

まとめの時間なんかもギリギリになって、学生さんたちって非常に大変なんですよね。まとめて発表まで行きますので、それがもう長くても 1 時間ぐらい、それぐらいしか取れなくなるので。それ 1 時間とっちゃうと本当にいろんな作業とか体験する時間っていうのが少ないんですよね。朝 9 時頃からですから。昼休みあるし、最終日は 3 時ぐらいで終わらないと。そしたら 4 時まで 1 時間の間に、もう自分でまとめて発表という感じまでいかなくちゃいけないので。それが少し不自由があるかなと思って。

A 氏の発言からは、単に体験するだけでなく学生の学びにつながる振り返りの時間を取りたいという理想と 4 時には学生を帰さないと行けないためにその分の体験の時間が減るという現実との間でもどかしさを感じている様子が分かる。実際に、振り返りの時間を現地でとることの重要性に関して、A 氏は「わからないことをやっぱりその場で質問してもらった方が(良い)。」とも話している。

このような時間的な課題について、B 氏は、X 村の地理的な特徴が活動時間を確保することの難しさの背景になっていると話している。B 氏によると、「無駄に土地面積があって、山越えてこのスポット行って、次にこっちいくとなると、移動距離も時間のロスが半端じゃないですよね。1 ヶ所にまとまってればいいんですけど。役場と公民館ですらそことそこですから。散らばりまくってるので、なかなかこう全部見せることができない。」のだという。

さらに、このような活動時間の確保の問題の解決策として、1 泊 2 日を 2 回という授業の設計に対して、「1 日増えた方いいみたいです。要するに 2 泊した方が、むしろその方がずっとこう効率的じゃないかな。」(A 氏)という提案もあった。

②　地域での深い学びにつながる事前学修の設定

地域の関係者がこの授業の課題としてあげていることは、事前学修が地域での活動と十分に対応したものとなっていないことである。

大学での事前学修の課題は、自分が行く市町村のことを自由に調べるというものである。これに対して、地域での活動において、地域の関係者が特に考えてほしいと思っている事柄に学生自身が気付ける一助となるような課題に予め取り組んでおいてほしいという話があった。A 氏は、事前学修の段階で、「例えば保全活動だったら、保全活動を自然相手にまず、そこのどこに自分が興味をもってるのかっていうそこら辺をはっきりしてもらった方が(良い)。ここをよく、詳しく知りたいとか。」といったことを学生が考えておいてほしいと話している。これは、「ここをもう少し調べてくれば、もっと(活動に)入っていけるんじゃないかっていうような」実感が A 氏にはあるからだという。

さらに、インタビュアーが学生に興味をもたせたい対象の例を聞いてみると、A 氏は以下のような例を答えてくれた。

> 例えば絶滅危惧種とか。Z 湿原だったら、限られてるわけですよ。ネット調べればすぐわかることだし、Z 湿原っていうのを調べただけでわかることっていっぱい出てきますんで。どんな絶滅危惧種がいるとか。絶滅危惧種ってどういうのかなみたいな、そういう関心をもってもらっただけでも、湿原来たときこれだとか、何か実物を見て(学んでほしい)。一つだけ言えばそういう感じですよね。

5. Y 町での学修に対する地域の関係者の「語り」の分析

(1)　調査の概要

インタビューは、2023 年 11 月 24 日(金)に Y 町の教育プログラムに関わっている教育委員会の担当者 1 名(C さん)と活動場所を提供している関係者 1 名(D さん)に行った。なお、担当になったばかりの C さんは、現地での活動に直接関わることは少なく、主に大学と地域との事務的な調整役である。一方で、地域で学生と接するのは D さんであり、この授業が始まった当初から長くこの授業に関わっている。

(2)　授業の成果に関する「語り」の内容

Y 町での学修の成果に関する地域の関係者の「語り」を整理してみると、以下に示す 2 つの事柄を授業の成果として捉えていることが明らかとなった。それぞれの内容について、実際のデータセットを示しながら説明していく。

①　地域の問題に対する学生の当事者意識の促進

地域の関係者がこの授業の成果としてあげていることは、学生が地域の問題を自分事として主体的に考える姿が見られることである。D 氏は、Y 町の活動を通して考えさせたい事柄である農業の人手不足について、学生が積極的に質問する様子に手応えを感じているという。実際の発言は以下の通りである。

> 体験を通して、私が、例えば、農業は人手不足です、人手不足で大変なんだっていうふうな提案をすると、いろいろな学生たちが、工学部であったり、農学部であったり、その学部に所属している学生が自分たちにできることを、できることがないかというふうな課題をもって私にいろいろな質問をするというふうなことがあったので、それはそれなりに学生たちに私の意思が通じているのかなというふうに

考えております。

この発言中にある「私の意志」というのは、地域での教育プログラムを提供する上で、D 氏が学生に期待していることである。D 氏は、学生が地域のコミュニティの一員となりながら、過疎化が進む農村をどのように活性化できるかを一緒に考えていける人材になることを重視している。実際の発言は以下の通りである。

全国の農村は少子高齢化で、なんて言いますか、農作業が大変だというふうなところが共通している課題です。それらをまずは学生たちに理解していただいて、その過疎化になっている農村をどのように活性化していくかというふうなところを、私達が今まで取り組んできた地域活動の一端を、コミュニティっていう形で学生さんたちと話し合いしながら、少しでも学生たちが考えられる知能を農村に活用できればなと(思っている)。将来的に学生たちが、農村に対して興味を持っていただいて、農村の活性化につながるような活動をしていただければなというふうな思いで体験を提供しているところです。

特に、長年この授業に携わっている D 氏は、こうした地域での積極的な学生の姿に対して、フィールドワークに対する学生側の心構えがしっかりしていることが影響していると分析している。D 氏は、学生の変化について以下のように語っている。

長年フィールドワークの方に携わらせていただいて、年々学生たちがですね、フィールドワークに対する考え方っていいますか、が変わってきているのかなというふうに思っております。それはあのフィールドワークを担当している先生方が、フィールドワークはこういうプログラムで、最上地域に貢献するプログラムなんですよっていうところを(伝えていて)、学生たちがしっかりと理解して、各市町村のプログラムに臨んでいるというふうな表れかなというふうに考えております。

フィールドワークに向かう学生の心構えができていることで、「課題を与えたときに学生がそういう自分事のように考えてくれるという意識って言いますか、そういうのが学生たちにあって、そういう学生がフィールドワークに対して参加してくれる学生が増えたのではないかなというふうに思っていました。」と D 氏は感心していた。

② 地域への親しみの醸成と活動の発展性

地域の関係者がこの授業の成果としてあげていることは、活動を通して地域への親しみを感じた学生が授業終了後も Y 町に関わってくれるといった、活動の発展性があることである。

長年この授業に関わっている D 氏から、受講生が山形大学の大学祭である八峰祭で Y 町産野菜の販売を行ったり、山形大学の学生食堂で Y 町産野菜を使ったメニューを販売したり、サークル活動の成果を Y 町のイベントで披露したりといった活動を自分たちで行ったことがあると紹介があった。

以前学生たちが Y 町で体験したフィールドラーニングの体験で、例えば、事例を出しますと、私達が生産した野菜を、八峰祭ですか、文化祭のところでブースを作っていただいて、販売していただいて、その販売していただいた売り上げの中から Y 町の支援金というふうな形で、Y 町に寄付していただいたというふうな事例もあります。それから学食のメニューとして作っていただいたというふうなこともありました。そのように学生たちが積極的に市町村と関わることによって、市町村の、何て言いますか、

発展にもつながるし、最上地域の何ていうか様々な事業に展開していけるのではないかなというふうに思っているので、ぜひそういう学生たちが自ら取り組む企画をですね。私達はなんぼでも協力はしますので、ぜひ企画をしていただき、企画に積極的に取り組んでいただきたいなというふうに思っています。

フィールドラーニングに参加した学生が、学生活動で四面楚歌っていう花笠のサークルがありますよね。Y 町の物産を紹介する若鮎まつりという祭りがあるんです、そこで、ステージ上でいろいろな芸能を発表する機会があって、フィールドラーニングに参加した学生が四面楚歌の部員で、それが Y 町の活性化につながるのであれば、その若鮎まつりに参加させていただいて私達が練習している花笠踊りを披露させてください、というふうな(提案をされたといった)つながりを持っていますね。

こうした成果は、今回の地域での活動が、学生の更なる活動に向かうことへの期待へとつながっている。学生が今後も Y 町とのつながりをもちながら Y 町で積極的に活動してほしいという願いについて、「よく言えば、学生が、Y 町に何らかの形で、研究とか、移住とか、興味を持っていただいて、つながりを持てるような人材が育てられればなというふうに思っています。」や「もっといろいろなつながりを持つことによって学生が Y 町に興味を持っていただく機会になるのかなというふうに思っていました。」と D 氏は話していた。

(3) 授業の課題に関わる「語り」の内容

Y 町での学修の課題に関する地域の関係者の「語り」を整理してみると、「活動に対する学生との共通理解の構築」ということを授業の課題として捉えていることが明らかとなった。C 氏は、学生の授業アンケートの結果を踏まえて、「アンケートと見てみますと、その予想と違っていたとかってやっぱりあるのでその不一致をなくしていって、いただけるといいかなと思います。思ったより農作業で大変だったり、そういう思っていたのと違ったっていう言葉があったりとかしたので、それ(引用者注　不一致をなくす努力)をやっていただけるとありがたいかなと思います。」と話している。地域側は、受講生の声をもとに受講生との共通理解ができる体制構築の必要性を感じていることが分かる。

6. 総合考察

フィールドでの学修を地域の関係者はどのように評価しているのかについて、「語り」に見られた授業の「成果」や「課題」に関わる発言を整理することで、大きく三つのことが明らかとなった。

第一に、学生が積極的に活動へと関わろうとする姿勢に価値を置きながら授業を評価していることである。地域の関係者が学生について語る様子から、一方的に学生に教えるという意識ではなく、学生の主体的な活動をファシリテートしようとする意識を大切にしていることが感じられた。具体的には、活動中の学生の積極性や自発性を評価するような「語り」や、地域が抱える問題について学生が自分事としての課題意識をもっていることを評価するような「語り」があげられる。このような「語り」は、地域の関係者がファシリテーターとしての関わり意識を強くもちながら、学生の主体的な姿に重きを置いて授業を評価しようとしていることの表れであるといえる。

加えて、ファシリテーターとしての地域の関係者が授業評価に関わることには、大学教員による授業評価を補える点でも意義があるといえる。大学教員が学生からの活動報告を中心に活動中の様子を把握しようとした場合に、学生による自発的な活動については学生自身の報告からは抜け落ちてしまうこともある。主体的な活動という側面から教育プログラムの成果を大学教員が的確に把握する上で、ファシリテーターとしての地域の関係者による評価を加味することは有効であろう。

第二に、地域での学生の学びの質保証を意識しながら授業を改善しようとする姿勢で評価していることである。具体的には、活動中の学びをより充実するために大学での事前学修との関連について問題意識をもつような「語り」や、活動に対する学生との共通理解の形成に関して問題意識をもつような「語り」があげられる。こうした「語り」は、学生が活動の中でしっかりと思考できているかを気にしている点で、単に活動をさせるだけではなくその活動を通して学生が何を学べるのかを地域の関係者が意識していることを反映しているといえる。こうした地域の関係者の姿が見られることは、大学教育に関する特別な訓練等を受けている訳ではない地域の関係者が、大学の教育活動として地域での学修に対する質保証においても重要な協力者として機能することの証左となるだろう。

第三に、授業終了後の学生による継続的な活動への期待が地域の関係者の授業評価には込められていることである。どちらの町村の関係者も地域での活動が学生の自主的な活動につながることを願っており、そのための魅力的な教育プログラムにすることを意識して授業を評価していることが明らかとなった。こうした地域の関係者がもつ期待が、地域と協働して取り組む授業評価の原動力になっているといえる。

7. まとめと今後の課題

本研究では、地域の関係者が行う授業評価に関して、「学生が積極的に活動へと関わろうとする姿勢に価値を置きながら授業を評価していること」「地域での学生の学びの質保証を意識しながら授業を改善しようとする姿勢で評価していること」「授業終了後の学生による継続的な活動への期待が地域の関係者の授業評価には込められていること」という三つの特徴があることを明らかにした。

本研究の意義は、地域の関係者が授業を評価する実際の様相に迫る中で、地域の関係者が大学の教育活動として地域での学修に対する有効なステイクホルダーとして機能することを示すことができたことである。授業について地域の関係者がどのように評価しているのかの実態を記録できたことは、地域研究において意義のあることであったといえる。

今後の課題として、「フィールドラーニング― 共生の森もがみ(山形から考える)」に関わる他の市町村へのインタビューも行うことで、「語り」を通して明らかにできる「成果」や「課題」の中身に関する研究を更に充実させていきたい。

付記

本論文の作成にあたっては、1、4、5、6、7 章と論文全体の調整を菊田が担当し、2 章を阿部、3 章を橋爪が担当した。

【参考文献】

1) 阿部宇洋（2018 年），「フィールドラーニングとフィールドワークの差異と民俗学への応用」，山形大学高等教育研究年報 Vol. 12 , pp. 29-32.
2) 小田隆治（2010 年），『大学職員の力を引き出すスタッフ・ディベロップメント　大学のアイデンティティを鍛えるプロジェクト創出型 SD の記録』ナカニシヤ出版.
3) 菊田尚人・阿部宇洋・橋爪孝夫（2023 年），「地域での体験活動を中心とする科目での SA の自主的な学びの様相―『フィールドラーニング―共生の森もがみ』でのインタビュー調査を通して―」，山形大学教職・教育実践研究 Vol. 18 , pp. 67-75.

注

1) ここでの「評価」とは、成績付けという意味合いではなく、授業改善を目的としたアセスメントとしての「評価」のことである。本研究では、「フィールドラーニング― 共生の森もがみ(山形から考える)」の授業をよりよくするために

地域の関係者が授業の成果や課題をどのように捉えているのかの実態を明らかにしていく。

2) 「フィールドラーニング― 共生の森もがみ(山形から考える)」については、小田(2010)や阿部(2018)が授業の成立やねらい等について、詳細に説明している。また、この授業に学生サポーターとして参加している SA の学びについては、菊田ら(2023)の研究がある。

A study on the trial of class evaluation by local stakeholders : Through an analysis of stakeholders' 'narratives' of their learning in the region

Naoto KIKUTA, Takao HASHIZUME, Takahiro ABE

The aim of this study is to clarify how local stakeholders evaluate local learning. The significance of this study is that it can demonstrate the feasibility of involving local stakeholders in the evaluation of classes to enhance learning in the region. Through semi-structured interviews with stakeholders in the Mogami region involved in Yamagata University's basic common education subject ' Field Learning in Area Campus MOGAMI(Yamagata Studies)', this study clarifies the actual state of evaluation of academic learning expressed as 'narratives' by the local stakeholders. In this study, with regard to the class evaluations carried out by the local stakeholders, the following three points were identified: 'they evaluate the classes while placing value on the attitude of the students to be actively involved in the activities', 'they evaluate the classes with an attitude of trying to improve the classes while being aware of the quality assurance of the students' learning in the region', and 'they evaluate the classes with an attitude of trying to improve the classes while being aware of the quality assurance of the students' learning in the region', and 'they evaluate the classes with an expectation of the students' continued activities after the classes are over'. The study revealed three characteristics: 'the class evaluations by local stakeholders contain expectations for ongoing activities by students after the classes have finished'.